

Feature

Trustedな 未来を支える 富士通の “場”と“人”

2019年7月16日発行 [ホープビジョン]

HOPE Vision

Vol. 33
2019 July

場・PLACE

- その1 館林データセンター
- その2 FUJITSU Knowledge Integration Base PLY

人・PERSON

- 開発者インタビュー「富士通のヘルスケア製品を支えています！」
- 中堅規模病院向け電子カルテシステム HOPE LifeMark-MX
- 患者向けサービス HOPE LifeMark-コンサルジュ
- 診療所向け電子カルテシステム HOPE LifeMark-SX
- 介護事業者支援システム HOPE LifeMark-WINCARE

プレゼント付き

アンケート
実施中！

詳しくは裏表紙へ

shaping tomorrow with you

社会とお客様の豊かな未来のために

FUJITSU

Trustedな未来を支える
富士通の“場”と“人”

2019年7月16日発行 [ホープビジョン]

HOPE Vision

Vol. **33** 2019 July
contents

Feature

Trustedな 未来を支える 富士通の“場”と“人”

Foreword Special

富士通株式会社
第二ヘルスケアソリューション事業本部 本部長

国分 出

信頼と創造 (TRUST & INNOVATION) で
次世代ヘルスケアICTを提供し健康長寿社会
づくりに貢献 ①

場・PLACE

FUJITSU Trusted Tour その1

館林データセンター ②

FUJITSU Trusted Tour その2

FUJITSU Knowledge Integration Base PLY ④

人・PERSON

開発者インタビュー

「富士通のヘルスケア製品を支えています！」

中堅規模病院向け電子カルテシステム

「HOPE LifeMark-MX」 ⑥

患者向けサービス

「HOPE LifeMark-コンシェルジュ」 ⑦

診療所向け電子カルテシステム

「HOPE LifeMark-SX」 ⑧

介護事業者支援システム

「HOPE LifeMark-WINCARE」 ⑨

check IT up

アイ・ティ・エス株式会社

重症度、医療・看護必要度評価システム「NsCare」 ⑩

日本システム株式会社

リハビリ管理支援システム「リハマネージャー NS」 ⑩

株式会社テクトロン

モバイル介護記録システム「モバイタルくん」 ⑪

株式会社富士通マーケティング

ChaMEO メディカルガイド ⑪

HOPE VISION Report

HOPE Cloud Chart・HOPE EGMAIN-LXユーザー向け
運用事例研究会

中堅規模向け電子カルテシステムの

ユーザー事例研究会を東京地区で開催 ⑫

表紙の写真：碓氷第三橋梁（群馬県）

※本誌の内容は、富士通ホームページ内の“ヘルスケアソリューション”
(URL <https://www.fujitsu.com/jp/solutions/industry/healthcare/>) に、PDFデータで掲載いたします。

信頼と創造 (TRUST & INNOVATION) で次世代ヘルスケアICTを提供し健康長寿社会づくりに貢献

国分 出

富士通株式会社
第二ヘルスケアソリューション事業本部 本部長

富士通の電子カルテシステムは、ノンカスタマイズでレベルアップする成長型のパッケージ製品として大規模病院向けでトップシェアの実績があります。医療現場の多様な運用やニーズを集約し、製品に反映させる仕掛けとしてのユーザー会（利用の達人）の運営など先進的なパッケージビジネスのノウハウを構築してきました。中堅規模病院や診療所向けの電子カルテシステムでは、そのノウハウをパッケージに反映して導入時の課題をクリアしスムーズな運用を可能にしています。また、運用形態の多様化に対応してクラウドサービスへの対応も進めています。富士通にはクラウド運用を支える信頼性の高いデータセンターがあり、数多くの開発スタッフがそれを支えています。信頼性を担保するための人材育成にも取り組みながら、健康長寿社会実現のため次世代のヘルスケアICTの開発を進めていきます。

ノンカスタマイズで成長型の電子カルテシステムを パッケージで開発

私は、2018年4月に第二ヘルスケアソリューション事業本部の本部長に就任しました。それまでは行政機関向けのシステム開発部門の本部長として、共通番号制度をはじめとする住民情報、介護・福祉情報、行政経営情報などの各分野にパッケージソフトやクラウドサービスを開発・提供していました。富士通のシステム関連ビジネスは受託開発（SI）とパッケージなどのアプリケーションビジネスに大別できますが、パッケージビジネスとしてはヘルスケア部門が最も大きく、富士通の中で3割を占めます。なかでも大規模向け電子カルテシステムを中心とするパッケージビジネスは、ノンカスタマイズで定期的なレベルアップによる成長型のシステムというビジネスモデルで大きな実績を上げています。特に、レベルアップのためのニーズの抽出や選択を行うための仕組み（ユーザー会「利用の達人」）の運営や、大規模向けだけでなく、中小規模から診療所、介護事業者、健診機関までマス・マーケットをターゲットにした営業展開など、他部門から見ても学ぶべき点が多くありました。

実際にヘルスケア部門の一員になって改めて感じるの、みんなが医療の現場をよく知っていることです。本部長から現場の担当者に至るまで、自分たちのソフトウェアの問題だけでなく、お客様の運用方法まで含めて問題点を指摘できるレベルで、



現場の運用や事情に精通したスタッフが数多くいます。それはやはり、トップシェアを持ち多くのユーザーからのフィードバックを得ながらシステムを“成長”できたことが大きいのでしょう。

大規模向けパッケージ開発のノウハウを中規模、診療所向けのシステム開発に展開

大規模向けの電子カルテパッケージ「HOPE EGMAIN-GX」の開発で必要だったのは、医療現場からの複雑な要求仕様に対して、短時間で、かつコストを抑えて必要なシステムを提供することでした。多種多様な要望に対して、個別開発ではなく多くの機能を標準で搭載し、あらかじめ用意したパラメータを切り替えて、お客様の要望に合ったシステムとして動かせるようにしました。つまり、オーダーメイドからレディメイドに製品を成長させ、ワンストップサービス（OSS）として業界に先駆けてサービスを提供し、開発の時間とコストを劇的に削減させたのです。

このノウハウを生かして開発したのが、中規模や診療所向けの「HOPE LifeMark-MX」や「HOPE LifeMark-SX」です。中堅向けのパッケージでは設定のパラメータを絞ることで、コストや導入作業の作業負担をさらに低減させました。こういった最適化の作業は、社内のSEだけでなく豊富なノウハウを持つパートナー企業の協力も得ながら開発を進めています。

システム開発を通じて日本のヘルスケアを支える技術と責任感を持った人材を育成

ICTでお客様の業務を支援することが、富士通の第一の使命です。富士通のSEの育成は、開発スキルの習得からスタートし、お客様の要件をシステムにインプリメントするスキルの習得、さらには将来のヘルスケアシステムをお客様と議論して製品を企画できるスキルの養成まで、何段階かのステップに分けた人材育成のカリキュラムを確立しています。最終的には、お客様にしっかりとした提言ができる知識と技術を培い、医療業界全体に恩返しができるような人材を育てていきたいと考えています。

個人的には、SEにはお客様の現場でほめられたという経験を持ってほしいと思っています。上司の「よくがんばった」と言っていたほうが、ずっとうれしいものです。それには、やはり現場を知ることが重要で、自分がかかわったシステムが業務にどのように使われているのかを実感することが必要です。

医療現場での責任を考えれば、お客様の製品に対する評価はシビアですので、直接いただく評価は大きな力になると思います。

ユーザー会である「利用の達人」は、第一線で活躍する医療者の方々から直接厳しい意見や評価をいただける良い機会になっています。それはやはり、電子カルテで大きなシェアを持つ富士通だからこそであり、若いSEにはこういった恵まれた環境を生かして、向上心を養い、より高いスキルを身につけて、自身の達成感や満足感につなげていってほしいと願っています。もちろん、ワークライフバランスも重要で、富士通では働き方改革、ダイバーシティにも力を入れています。富士通の一員として日本のヘルスケアを支えているというプライドを持ちながら、バランス良く時間を使える人材を育てていきたいですね。

信頼（Trust）をベースにした次世代HISで健康長寿社会の実現に貢献する

医療情報システム（HIS）の信頼（Trust）という意味では、ISO、SDEM^{*1}、ITIL^{*2}など、社内外の標準をベースに厳格に品質管理を行うことが必要です。特に、診療プロセスの中でシステムの不具合が診療に大きな影響を与えかねない機能については、厳しい基準を設定して徹底的に品質管理を行っています。また、クラウドサービスを提供するデータセンターについても、富士通は館林や明石など全国に自前の施設を持ち、高い堅牢性とセキュリティを備えた信頼性の高いサービスを提供しています。セキュリティなど日本のお客様が求めるサービスのポイントも熟知していますので、万一のトラブル時や運用に大きな変更があった場合などの対応も、連携がとりにくい海外他社にはない、日本の富士通だからこそその強みだと思います。

病院や診療所、介護分野の施設は、少子高齢化をはじめとする社会的背景が大きく変化する中で、運営形態の多様化が進んでいます。特に地域医療ネットワークを前提とした病診連携や医介連携、医薬連携の充実などが強力に推し進められるようになりました。さらに、政府の「未来投資戦略」にも示されるように、社会保障費の増加を抑え、人生100年時代（健康長寿）を実現するためには、医療・介護情報の共有だけではなく、個人の健康にかかわるあらゆる情報を集約・活用し健康で長生きする（つまり病気になるしない）ためのプラットフォーム（PHR）づくりが求められていると理解しています。そこでは、ヘルスケア関連情報を、業種を超えて流通させ活用できるオープンデータ社会の実現をめざすことが必要だと考えています。このような新しい社会づくりの根幹をなす次世代HISをめざして「HOPE LifeMark-HX」の開発を進めています。

次世代HISでは、すべてを自社開発するのではなく、さまざまな業界のトップベンダーのサービスと結合して大きな価値を生み出す、いわゆるメッシュなクラウドサービスになるものだと考えています。また、同時に医療業務の効率化の支援も電子カルテシステムの重要な役割であり、人工知能（AI）による診断支援や音声入力による省力化、ゲノム医療など従来技術の進展をも加速するものだと考えます。

富士通のヘルスケア部門は、常に医療業界を中核とした健康長寿社会の実現をめざし、世界のステークホルダーとの協働でこれからも活動を進めていきます。■

※1 SDEM＝富士通の企画、開発、運用・保守、品質保証活動の基本的な考え方を示した標準プロセス体系。
※2 ITIL＝ITサービスマネジメントのベストプラクティス（実践され良いと認められたやり方）をまとめた書籍群。

Trustedな未来を支える 富士通の“場”と“人”

富士通が提供する電子カルテシステムをはじめとしたさまざまなヘルスケア・ソリューションのバックグラウンドには、最先端の設備（PLACE）と技術を支える多くの人（PERSON）の存在があります。今回は、2か所の場と4つの開発チームの声を紹介します。

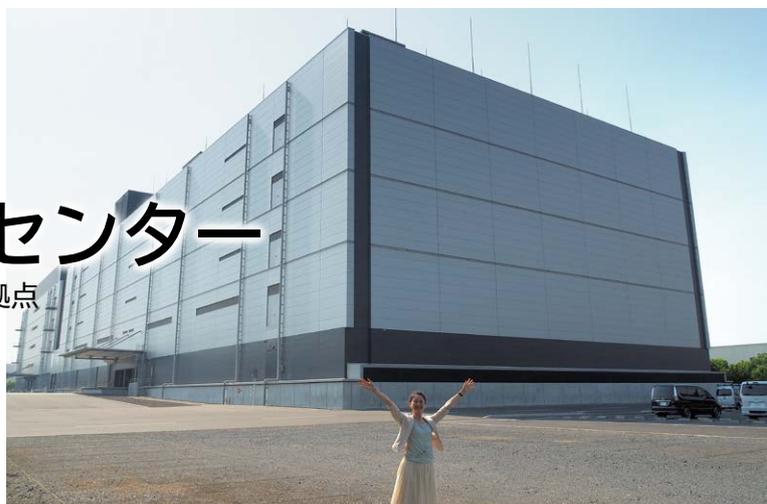
場

PLACE

FUJITSU Trusted Tour **その1**

富士通・館林データセンター

国内最高水準の機能で次世代サービスを支える最新拠点



HOPE Vision 事務局



電子カルテやHumanBridgeのデータを管理するデータセンター。富士通最大のデータセンター施設である館林データセンターに来ています。櫻井俊輔さん（デジタルビジネス推進本部アウトソーシングサービス推進部 シニアマネージャー）にご案内いただきます。

富士通では、館林のほか、横浜に2か所、関西の明石、大阪千里の5つの主要拠点を中心に、北海道から九州まで複数のデータセンターを運営しています。その中でも館林データセンターは最大規模を誇り、高い堅牢性、高セキュリティでお客様のシステムやデータをお預かりしています。同時に、外気を利用した空調方式などグリーンテクノロジーを実装することで、環境負荷を低減しているのが特徴です。今日は、データセンターの内部をご案内します。

案内人



櫻井俊輔

受付～サーバ室前室



④ 入館には事前申請が必要です。事前に発行されたIDとパスワードで受付します。受付では、生体認証のため手のひら静脈を登録^Aし、非接触ICカードが発行されます。館内には、あらかじめ申請された物以外は持ち込めません。最後にサーモグラフィーと金属探知機のチェック^Bを受けて入館です。



Trusted ポイント 1 高セキュリティ

④ サーバ室へ入る前に入室者の最終的な確認を行うのが“前室”です。床が千鳥格子柄になっていますが、これによって天井の動線カメラが入室者の人数を自動認識します^C。人数分の本人確認が完了しない限り、サーバ室のドアは開かず、共連れを防止しています。また、サーバ室のサーバラックはすべて施錠されており、このラックの施錠管理をしているのが“キーステーション”です。ラックの解錠にも、ICカードと手のひら静脈認証が必要です^D。作業終了後、キーステーションで施錠します。ラックにはオートロック機能がついており、施錠し忘れても一定時間経過後に自動的に施錠されます。



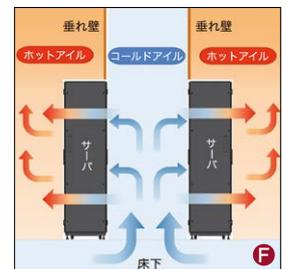
統合管制室

④ 統合管制室では、当センターでお預かりしているシステムを、24時間365日体制で監視しています。サーバの稼働状況から、CPUやメモリの使用率、ストレージの残量、プログラムの稼働状況などシステムに関するすべてを監視することができます。エラーメッセージが出れば内容を確認し、事前に決めた運用設計に沿って、問題解決のための行動をとります。正面や側面の大画面モニターには、富士通のほかのデータセンターの情報やトラブル時のお客様情報など、任意の映像を映し出すことができます。



サーバ室

④ コンピュータのハードウェア性能の向上で、サーバ室を過剰に冷やす必要はなくなりました。しかし、発熱はするので冷却の仕組みは必要です。ここでは、吸気と排気の空間を分けた“コールドアイル・ホットアイル物理分離”でラックを設置しています。サーバの前面（吸気）側の通路をコールドアイル⑤、背面（排気）側をホットアイルと呼んでいます。コールドアイルは天井を低くしてドアをつけた密閉空間で、床からの冷気で冷やします。ホットアイルは解放空間で、サーバからの熱く軽い排気は上昇して天井近くの排気口から排出されます⑥。熱い空気と冷たい空気が混ざらないようにして、効率よく温度管理を行う設計になっています。



Trusted ポイント 2 堅牢性

その1「災害対策」

④ 自然災害への備えは、データセンターには必須の機能です。館林データセンターのB棟・C棟は大規模地震災害対策（阪神淡路大震災、東日本大震災相当）として免震構造を採用しています⑦。B棟・C棟ともに阪神淡路大震災の1.5倍の揺れにも耐えられる設計です。東日本大震災では、館林市は震度5強の揺れを観測しましたが、免震設備により被害はありませんでした。そのほか、水害、落雷、火山噴火などあらゆる災害を想定した対策を行っています。



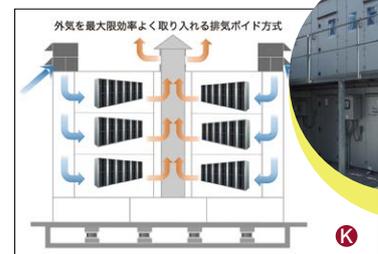
その2「停電対策」

④ 外部からの電気はUPS（無停電電源装置）を介してサーバ室に送られています⑧。停電の際でもUPSを通して電源を供給するため、データセンター内の電源が途切れることはありません。UPS設備は冗長化し、5分以上のバッテリー給電が可能です。外部電源が復旧しなければ、その間に非常用自家発電装置⑨を起動します。オイルタンクには、72時間連続稼働が可能な燃料を常時確保しています。さらに複数の石油元請け会社と契約して大災害時の燃料確保のリスクを低減させています。



Trusted ポイント 3 グリーンテクノロジー

④ 館林市周辺では日没後は外気温が下がります。この環境を利用し、2016年に開設したC棟では、年間およそ7000時間、全体の約8割は屋上の給気口⑩から取り入れた自然の外気を利用してサーバを冷却しています⑪。データセンター全体の消費電力をICT機器の消費電力で割って求めるPUE（Power Usage Effectiveness）という電力使用効率の指標がありますが、C棟はPUE 1.2という高い目標値をめざして設計されています。また、自然エネルギーである太陽光発電を屋内照明に利用するなど、環境問題に取り組んでいます。



データセンターサービスは、お客様の大切なサーバ資産をお預かりするものから、安定した稼働環境の提供が最も重要です。富士通には、1995年の開設から培ってきたノウハウがあり、高品質・高信頼の稼働環境をご提供することができます。また、もう1つの富士通の強みは人材です。ファシリティの信頼性、セキュリティの堅牢さ、そして教育によって育む「人」の品質を重視して、これからも安心・安定のサービスをご提供していきます。

事務局：高い技術と人の力のハーモニーが信頼を生むことが実感できました。今日は、ご案内ありがとうございました。

FUJITSU Knowledge Integration Base PLY

アイデアを紡ぎ、未来を創る“場”



▲ PLYは、富士通ソリューションズスクエア（東京都大田区新蒲田）の2階にあります。

HOPE Vision 事務局



2016年5月に、事業共創のためのコミュニティスペースとして、富士通ソリューションズスクエア（東京都大田区）にFUJITSU Knowledge Integration Base PLY（プライ）がオープンしました。「燃り合わせる、積み重ねる」という意味を持つPLY。人やアイデア、技術が重なり合う“場”として活用されているPLYをご紹介します。

PLYって
どんなところ!?



FAB Space

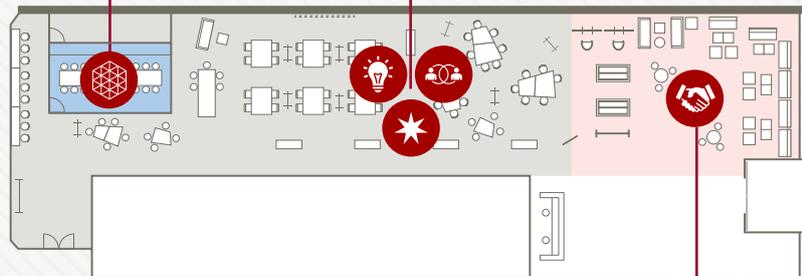
3Dプリンタやレーザーカッター、工具類がそろった作業スペース（3Dプリンタとレーザーカッターは取扱講習の受講者のみ使用可能）。ワークショップやアイデアソンで出たアイデアを、実際に形にすることができる。

WORKSHOP CoWORKING Space

ワークショップやセミナー、アイデアソンなどを行うスペース。台形テーブルを組み合わせ、フレキシブルに空間を活用できる。

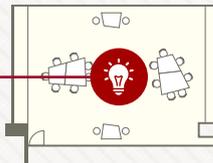


取材当日は、3D Global GmbH社（ドイツ）が開発した3D裸眼ディスプレイが持ち込まれており、私たちもデモンストレーションを見せてもらいました。



LEAN Studio

PCで実際にプログラミングしたり、アイデアを素早く形にするアジャイル型の創造を実践できるスペース。



WAITING EXHIBITION Space

待ち合わせをしながら、PLYで生まれたプロトタイプやデモアプリなどに触れられるスペース。



展示品には、多くの感想が寄せられています。

インタビュー 共創の“場”として人をつなげる

年々、利用者が増加している PLY。PLY の特徴や活用事例について、PLY のスタッフである鈴木規之さんにお話を聞きました。

PLY は「SE の道場」

富士通には、いくつかのオープンイノベーションの場がありますが、その中でも PLY は、SE の本拠地にあるのが特徴です。PLY では、一方通行になりがちなセミナーではなく、登壇者と参加者が双方向でやりとりできるような参加型のイベントを主に行っています。基本的には SE が刺激を受けたり、自分で学び、成長できるような企画が中心です。

PLY 内には、富士通製品以外の機器やサービスが多数、展示されており、これらの展示やワークショップでアイデアを得たら、FAB Space の設備を使って、すぐに形にできるのが PLY の強みです。例えば、「腕時計型のウェアラブルツールを使った健康管理ビジネスをしたい」というプロジェクトが立ち上がった場合、SE はクラウド上

のデータだけでなく、データの取得方法やクラウドまでの伝達経路を理解していれば、より良いサービスがつけられるかもしれません。それを理解するには、実際にセンサなどの部品に触れ、体験するのが一番です。そのため、FAB Space には、さまざまな機材を数多く取りそろえています。このように PLY は「SE の道場」をイメージしています。

「あしたのコミュニティーラボ」で PLY を活用

富士通が社会課題解決のためのプラットフォームとして運営している「あしたのコミュニティーラボ」でも、PLY は重要な場として活用されています。また、PLY はビジネスを主目的とした場ではありませんが、お客様と富士通との間で、「こういう

サービスをつくっていききたい」というビジョンができれば、一緒に小さなプロトタイプをつくったり、ビジネスモデルを考える「共創」の場として活用しています。



鈴木規之
サービステクノロジー
本部フィールド
支援統括部

PLY を「ハブ」としてつながりを広げたい

PLY のオープンスペースには、来場したお客様が「自分はこんな技術を持っています!」といったメッセージを貼れるボードがあるのですが、それを見た人が互いに連絡を取り合い、そこから新しいコミュニティが生まれることもあります。PLY をハブの機能を果たす場にしていきたいと思っています。

あしたのコミュニティーラボ

人をつなげて新たな価値を生み出す共創の“場”に

SE の共創を促進する取り組みの一つが、2012 年 4 月に始まった「あしたのコミュニティーラボ」。“人にやさしい豊かな社会”の実現を目標に、Web メディアでの情報発信やイベントを通じて、社会課題の解決に取り組んでいます。これまでの活動や今後の目標について、「あしたのコミュニティーラボ」編集部の方々に聞きました。

「あしたのコミュニティーラボ」とは、どのような取り組みですか？

宮 「あしたのコミュニティーラボ」は、Web メディア (<https://www.ashita-lab.jp>) を通じて、先進的に社会課題の解決に取り組む人や、事例を紹介しています。また、記事を読んで関心を持った方々をつなげる場を提供するイベントを開催しています。

櫻 取り扱うテーマは、“健康・ヘルスケア”“学び”“ものづくり”“まちづくり”“働き方”などさまざま、生活者の視点で幅広く社会との接点をつくることを目的にしています。

具体的にはどんなことに取り組んでいるのでしょうか。

宮 ヘルスケア領域では、歯から QOL 向上をめざす予防歯科プロジェクトと連携しています。約 40 年前から、いち早く予防歯科を推進してきた日吉歯科診療所

(山形県酒田市)の熊谷 崇先生の取り組みに共感し活動を紹介してきました。予防歯科に取り組む歯科診療所や企業のネットワークを広げ、富士通としては、歯科診療所向けクラウドサービスの提供を通じて、予防歯科の普及に協力しています。ほかにも医工連携を支援する「看工連携プロジェクト」との共同企画や、学生と社会人がともに学び、地域の課題を解決する「あしたラボ UNIVERSITY」などを行ってきました。

社内の反応はどうですか？

宮 社内の SE からは、社外との接点づくりに役立つという声があります。以前、「健康経営」をテーマとした取材に、ヘルスケア部門の SE も同行したのですが、その取材をきっかけに大学の先生とのつながりができたこともありました。

宮 普段の SE の業務の中では、お客様の環境やニーズの変化になかなか気づくことができませんが、「あしたのコミュニ

ティーラボ」では、一歩先の課題やニーズにいち早く目を向けることができます。また、編集部のメンバーは元々各部門の出身ですから、バックグラウンドを生かして、現場の SE とうまく連携していると思います。

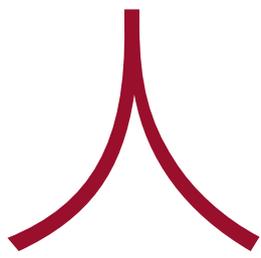
今後の目標を教えてください。

宮 活動を通じて、社内社外問わず新たな取り組みのヒントになるような情報を蓄積していきたいと考えています。

櫻 今は、企業が単体で課題を解決するのは難しくなり、“共創”が求められています。「あしたのコミュニティーラボ」が、共創に必要なハブとしての役割を果たしていけるようにしたいですね。



左からビジネスマネジメント本部戦略企画統括部・高橋 誠、同統括部長・宮川 武、同シニアマネージャー・櫻本直子



開発者インタビュー

富士通のヘルスケア製品を 支えています！

PERSON



中堅規模病院向け電子カルテシステム 「HOPE LifeMark-MX」

販売パートナーと共に中堅規模の病院の
電子カルテ導入を支援します

規模や診療内容もさまざまな中小病院に
フィットしたシステムを提供したいですね

瓦 知哉

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第二ソリューション事業部
マネージャー

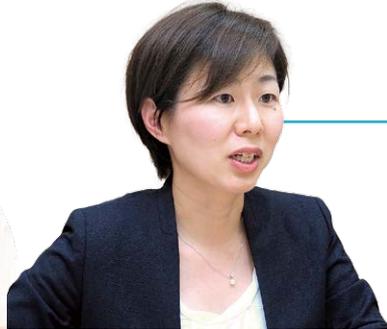
“どんな困難でも越えられない壁はない”と思っています。最終的にはなんとかかなと前向きなのが取り柄です。ストレス発散はお菓子を食べること。



稲垣江利

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第二ソリューション事業部
マネージャー

悩んだときには、相談するタイプ。上司や同僚、時には家族にも話してアドバイスを聞いて参考にします。リラックス方法は3歳の娘の世話、家に帰ったら仕事は忘れず。



販売パートナーと共につくる 電子カルテ

瓦：中堅規模病院向けの電子カルテシステムと大規模病院向けとの一番の違いは、販売と導入の主体が販売パートナーだということです。それだけに、販売だけでなく開発でも販売パートナーとの信頼関係が重要です。私も全国の販売パートナーと共に導入支援しています。トラブル時には、“ホットライン”で直接携帯に連絡をいただくこともあって、少しずつ関係が深まっているのかなと感じます。

稲垣：EGMAIN-LX、LifeMark-MXの機能向上の取り組みとして、販売パートナーSEスペシャリストによるワーキンググループ(WG)活動を2018年から開始しました。販売パートナーの要望は以前から集めていましたが、最終的な仕様の取捨選択はわれわれが行っていました。しかし、現場に近い販売パートナーの意見を反映させるほうが、よりの確かな機能向上

が可能になると考え、認定試験をパスしたスペシャリストによるWGを設けて、要望を検討、選定して決定する活動を行っています。

中堅規模の医療機関の体制を 考慮した機能を開発

瓦：中堅規模病院向けの電子カルテシステムは、EGMAIN-NXからEGMAIN-LX、そしてLifeMark-MXへと進化してきました。EGMAIN-LXの時に、大規模病院向けのEGMAIN-GXと同じ操作性を取り入れて大きく変化しました。LifeMark-MXは、EGMAIN-LXを踏襲しつつスピードや操作性の向上を図ると同時に、サーバの小型化やクラウド型のCloud Chartの提供など中堅規模病院に向けた機能やサービスを充実させました。大規模病院向けでは何万とある設定値を、LifeMark-MXでは1000程度に絞っています。SEでなくても簡単にメンテナンスできるように設定画面を作成して、施設や販売パートナーの負担を減らす設計になっています。

激変する医療環境に対応できる システムを提供

瓦：“病院”という環境が好きで、病院のシステムづくりにかかわる仕事をしたいと思っていました。開発では、先生から要望された機能や販売パートナーが売りやすいシステムを優先しがちですが、その先の患者さんの治療や回復を支えられる製品をつくるという原点を忘れないように、システム開発に取り組んでいきます。

稲垣：中堅規模病院向けの電子カルテシステムでは、病院に本当に求められるものを見極めて、その時のニーズに合った製品や機能をタイムリーに提供することが重要です。診療報酬改定や制度の変更で医療業界は変化が急です。さらに中小規模の病院は求められる役割がさまざま、地域や規模によって必要とされる機能が異なります。病院のニーズに遅れることなく、最適なタイミングで必要な機能を提供していきたいです。



患者向けサービス 「HOPE LifeMark-コンシェルジュ」

“使う人の気持ち”まで考えて サービスを設計

柳：LifeMark-コンシェルジュのプロジェクト立ち上げ時から参画しています。スマートフォンが普及し、生活インフラになろうとしています。その中で、再来受付や診察呼出などのサービスをひとまとめにしてスマートフォン向けに提供し、患者さんの利便性の向上を図ろうというのが開発の発端です。患者さんの“よろず案内人”になりたいという思いで呼んでいた開発時のコードネームが、そのまま製品名になりました。スマートフォンアプリだからこそその苦労はありましたが、“使う人の気持ち”まで考えて開発したことが、効率化を追求する業務システムとは異なる、LifeMark-コンシェルジュの特異性だと思います。患者さんは年配の方が多いため、スマートフォンは使わないのではという懸念もありましたが、実際に稼働すると高齢の方ほど積極的で、歳を重ね

ても新しいことにチャレンジしようとする姿に感動しました。

富士通だからできる 付加価値の創出をめざして

山本：LifeMark-コンシェルジュは2016年11月にリリースし、複数の病院で稼働を始めています。誰もが利用者になりうるサービスだからこそ、社内外からさまざまな要望や意見が寄せられています。限られたリソースの中で、どの機能を追加・強化し、どのように発展させていくのかが、今の課題です。その判断基準のベースとなるのが、「富士通だからできること」ではないかと考えています。私は、大規模病院向けパッケージの開発を経て、3年ほど前からデータ活用系ソリューション開発チームのマネジメント担当となり、それと併せてLifeMark-コンシェルジュも担当するようになりましたが、基幹システムに取り組んだ経験を踏まえて、LifeMark-コンシェルジュにさらな

る付加価値を生み出していくことが自分のミッションだと思っています。

テクノロジーで社会を次の ステージへ

柳：プロジェクト発足当時、同じようなサービスはまだ世の中にありませんでした。スマートフォンが世の中を変えたように、テクノロジーが新しい社会をつくるようになってきている今、社会の次のステージを提案できるようなサービスをつくりたいと考えています。LifeMark-コンシェルジュも、健康寿命の延伸に貢献するようなサービスに成長させたいですね。

山本：医療制度は国によって違いますが、医療費の増大や医師・スタッフ不足、医療ミスなど、ヘルスケアの社会課題は世界共通です。富士通は、その解決のためのリソースを持っているので、社会課題の解決に向けた取り組みを、日本だけでなくグローバルにも展開していきたいと思っています。

富士通だから生み出せる付加価値を
サービス開発に生かしていきます

LifeMark-コンシェルジュを
健康寿命の延伸に貢献するシステムに
育てたいです

山本昌徳

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第一ソリューション事業部
マネージャー

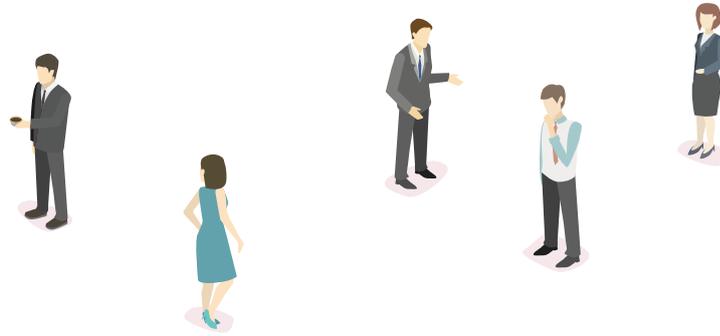
常に“正直であること”を心がけています。アウトドアが趣味で、最近、パラグライダーを始めました（高いところは苦手なのに）。



柳 晶子

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第一ソリューション事業部

好きな言葉は“神は細部に宿る”。仕事においても人と接する上でも、大事なことだと思っています。



診療所向け電子カルテシステム 「HOPE LifeMark-SX」

新しい技術を吸収しながら横に広がる
製品開発に挑戦したい

販売パートナーと密に
コミュニケーションをとることで、
信頼関係を築いていきます

大橋 繁

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第二ソリューション事業部
第二ソリューション開発部

仕事では大変な局面もたくさんありますが、へこたれないでやっていけるのは楽しく働ける職場だからだと思います。リラックスにはお酒が一番。



川越雅文

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第二ソリューション事業部
第二ソリューション開発部

趣味のゲームでは、アイコンや画面配置、操作性など、カルテ画面を考えるヒントが得られるので一挙両得です！

4つの“S”をコンセプトに、 時代に合った製品をめざす

川越：診療所向けの電子カルテシステムは、Dr'noteに始まり、その後、EGMAIN-CX、EGMAIN-RX、LifeMark-SXと発展しました。LifeMark-SXは、カルテと医事の一体化を進めるとともに、iPhoneやiPadなどのスマートデバイスでカルテ参照や問診入力を可能にするなど、コ・メディカルの働き方にも配慮した点が特徴です。また、地域包括ケアやBCPに対応するため、クラウド基盤を活用したサービスも新しく開発しました。

大橋：SXは、Speed（より快適に）、Simple（より簡単に）、Support（より安心に）、Shape（新たなかたちへ）の4つの“S”がコンセプトです。お客様からの要望をもとに機能を開発していますが、販売パートナーの導入・保守のしやすさも考え、できるだけメンテナンスが発生しないように

開発しています。

部署を超えた連携が 開発の力に

川越：診療所の新規開業では、先生が病院で富士通の電子カルテを使っていたというケースも多くあります。病院向けカルテを使っていた先生が使いやすいようになるよう意識しました。EGMAIN-RXなどの旧製品を使っていたお客様のことも考慮する必要がありますので、そのギャップを解決するのが大変でした。

大橋：クラウドの開発は経験が浅かったため、オンプレミスの開発とは異なる技術が必要でした。現在、1000を超えるお客様がLifeMark-SXのクラウド機能を使っており、データセンターの安定稼働は必須です。ヘルスケアでは、クラウド基盤を使ったHumanBridgeを展開しているため、担当部署と連携してノウハウを応用できたことは、開発において大きな力となりました。

お客様との二人三脚で 市場に合った製品を提供

大橋：現場で先生方と会話を重ねることで、その経験を生かして先生方に評価していただけるような使いやすいシステムの開発を心がけています。地域においては、診療所と介護が密接な関係になっています。LifeMark-SXでも富士通の介護システムであるLifeMark-WINCAREとの連携を強化するなど、つながる広がりをもたせていきたいと考えています。

川越：現場で発生するさまざまな課題は、販売パートナーと一緒に考えて対応しています。お客様が不安に感じないように、販売パートナーと常に状況を共有しながら迅速に課題の解決にあたっていることで、お客様からの信頼が得られると思います。他社にはない先進的な機能の実装が富士通の強みであり、これからも市場に合った製品の迅速な開発・提供に挑戦し続けます。



介護事業者支援システム 「HOPE LifeMark-WINCARE」

介護システムで高齢者を 笑顔に

板垣：最初は介護分野はまったく未知の世界でした。介護向けのパッケージ製品を開発するためには、現場の運用を知る必要があると考えて、ユーザー先を訪問して現場を見て声を聞くようにしました。介護現場で働くみなさんが福祉の心を持って業務にあたる姿を目の当たりにして、介護システムがスタッフの業務負担を軽減して、高齢者の方がより良いケアを受けられるようにしたいという気持ちを強くしました。

黒木：私は、個人的な経験からお年寄りが最後まで笑って過ごせる社会にしたいという思いがあって介護にかかわる開発を希望して WINCARE のチームに参加しました。介護システムの直接のお客様は導入先の施設ですが、われわれのミッションはお客様のお客様（利用者）を幸せにすることです。そのためには現場を知ることが重

要で、タブレット端末の開発では、お客様と現場でディスカッションして意見を製品に反映するアジャイル型の開発を行いました。

介護の現場に入って ユーザーと共に共同開発

板垣：LifeMark-WINCARE の開発の前に、タブレットを使った訪問看護師向けの機能をユーザーのもとで共同開発しました。WINCARE では、その成果を生かして、タブレットを使って訪問先でも入力でき、リアルタイムで情報共有が可能な機能を中心に強化しています。

黒木：LifeMark-WINCARE の開発コンセプトは、マニュアルレスです。タブレットの画面を考慮して入浴やリハビリなどシーンに合わせたシンプルな画面にすることで、介護スタッフが利用者と会話しながらでも使えるシステムになりました。このタブレットシステムでは、現場スタッフの働き方改革が実現できたと感謝され

て手応えを感じました。

医療と介護の連携からさらに その先へ

黒木：医療と介護の連携が求められる中、シームレスな情報連携が必要です。電子カルテで高いシェアを持つ富士通の強みを生かし、横の連携を強化してよりお客様、患者さん、介護サービス利用者の幸せにつながるシステムを開発したいですね。

板垣：介護現場では ICT が苦手という方も多く、音声入力など誰でも簡単に使えるシステムを開発していきたいですね。さらに、その先の夢はシステムの海外展開です。介護や医療の情報システムは、国の制度と不可分で輸出は難しいのですが、例えば台湾は日本の介護保険制度をモデルにしていることから、2018 年に台湾のお客様にもシステム検証として WINCARE を導入いただきました。これを足がかりに海外の方にも WINCARE を利用いただくことが私の夢です。

高齢者が最後まで笑って過ごせるための
介護システムをつくりたい

人間対人間の介護の現場を支援する
システムを開発したいですね

黒木輝秀

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第三ソリューションデリバリー事業部
マネージャー

“発言は責任を伴う”ことを常に心に留めています。一度言った以上は、最後まで責任を持って行動せよという自らへの戒めです。



板垣 創

第二ヘルスケアソリューション事業本部
第三ソリューションデリバリー事業部
シニアマネージャー

座右の銘は“チャンスは溜められない”。その一瞬のチャンスを掴むために、普段からどれだけ準備できるかが勝負です。リラックス方法は趣味のピアノを弾くこと。



アイ・ティ・エス株式会社

重症度、医療・看護必要度評価システム「NsCare」

データ提出加算はおまかせ！
簡単操作で業務軽減

重症度、医療・看護必要度は、施設基準の要件としてだけではなく、看護配置や要員管理など、医療・看護の質を担保する意味でも有効と考えられています。本システムは看護・事務作業の負担軽減を目的とした開発を行い、院内の作業効率化をサポートいたします。

特長

① 簡単入力

毎日行う入力作業の負担が軽減される操作性になっています。前日評価を引き継ぐことで変更項目のみの入力で完成させることができます。多数の患者様の評価をスムーズに入力できます。

② 運用に合わせた入力フォーム

日々入力、一括入力、患者指定入力の3つの入力機能を用意しており、病院

様の運用や入力方法に合わせて評価入力の方が一番使いやすい画面から作業を行います。

③ 統計処理

データ提出用Hファイルの作成や月次で行う面倒な統計処理も簡単にExcel出力できます。日々入力いただいた評価内容を内容に応じてシステムが集計します。

ここがポイント！

HOPE SX-R、SX-Sと連携することにより、患者基本情報（氏名、性別、入院退院履歴など）のシームレスな連携が可能です。

また、フリーライセンスのため同一ネットワーク上のPCであれば入力が可能です。（Internet Explorer必須）



病院様運用の変更や作業PCの配置替えにもスムーズに対応ができます。富士通製医事システムをご利用で紙カルテ運用、データ提出加算の申請を行っている病院様には必要不可欠なシステムです。

販売価格：55万円～

アイ・ティ・エス株式会社
北海道内：本社
ヘルスケアソリューション営業部 中村
TEL：011-261-1451
E-mail：tmnakamura@its-sap.co.jp
北海道外：東京支店 杉山
TEL：03-6421-7433
E-mail：jsugiyama@its-sap.co.jp

日本システム株式会社

リハビリ管理支援システム「リハマネージャー NS」

リハビリテーションの現場をより快適に心地よく

日々の操作（スケジュール・実績管理）は、見やすい画面で初めて利用する方でも直感的に操作を行えるようなユーザーインターフェースの設計にこだわりました。

特長

① 直感的に操作を行える

ユーザーインターフェース
ドラッグ&ドロップ操作で予約や実施の【登録、時間調整、担当者移動、単位数変更】管理ができます。勤務（休み、カンファレンス、会議など）スケジュールの登録もできます。

② 情報共有の効率化

コミュニティ機能（メール、掲示板）やWebアプリケーションを利用した豊富な機能で情報共有が可能です。

③ データの見える化

セラビューア機能（BIツール）で、データ資産がわかりやすく表示でき、切り口を変えて見ていくことで新しい発見・気づきが生まれます。

ここがポイント！

HOPE製品とシームレスな連携を行い業務効率化を実現します。

医事会計システム、電子カルテシステムなどの基幹システムと接続し、院内全体の業務効率化を支援します。

私たち日本システムは、15年以上にわたって病院・クリニックにおけるリハビリテーション業務に携わるすべての方々にシステムを支えてきました。

これからも多くの皆様方にリハビリテ



ーション業務のICT化を提案させていただき、「リハマネージャー NS」の構築・サポートを通じてリハビリテーションの現場における新しいカタチの運用を支援いたします。

お問い合わせください。

日本システム株式会社
医療福祉営業部
TEL：099-254-7200
E-mail：nsk.reha-sales@jpsys.co.jp

モバイル介護記録システム「モバイタルくん」

介護現場で手早く簡単記録入力

「モバイタルくん」は、富士通介護事業者支援システム WINCARE シリーズと連携し、介護現場で使用するモバイル介護記録システムです。モバイル端末と PC ですぐに記録データを共有 / 活用することによって、より良いサービス提供に貢献します。

特長

- ① **いつでもどこでも手早く簡単入力**
無線 LAN の電波が届かないところでも記録を手早く簡単入力が可能だから、無線 LAN の設備投資を抑えることができます。
- ② **対応機器から測定値を自動取込**
Bluetooth 接続によって対応機器から体温・血圧・脈拍・体重を自動取込可能です。

- ③ **1 台で複数機関を切り替え**
機関切り替えに対応しているので複数機関で使用できます。

ここがポイント！

- ① モバイル端末なのでいつでもどこでも簡単に候補から選択し、最大 2 タッチで入力完了。しかも記録者が記録したいデータに適切な入力方法（個別・一括・リスト）を選択可能だから入力するストレスを軽減します。
- ② WINCARE に登録されている利用者情報・ADL（日常生活動作）情報・リハ実施計画などの参照も可能です。

施設系、通所系（Cloud 含む）に対応
※ 訪問系には対応しておりません。



基本システム：30万円～
端末ライセンス：1万5000円×端末台数

株式会社テクトロン
システム開発部 水上、長浜
TEL：0545-54-2201

ChaMEO メディカルガイド

待ち時間の明示化で患者様のイライラを解消し、現場の業務負担を軽減

富士通マーケティング製デジタルサイネージ運用ソフトウェア「ChaMEO」をベースとし、病院の患者様向けに診察・会計待ち順番の案内や院内の各種情報のデジタルサイネージ（電子看板）化を実現したシステムです。

特長

- ① **患者サービス向上**
会計・診察の見える化で患者様がずっと待合室で待たなければならぬストレスを軽減します。
- ② **運用管理が簡単**
テロップ文字、代診・休診情報、病院案内の更新は、メモ帳や Excel を上書きするだけで簡単に編集可能です。
- ③ **低コスト、短納期での提供を実現**
最短 1 か月半で構築可能。業界最安

値をめざします。

ここがポイント！

従来の待受表示盤システムと比較して低コスト、導入期間の短縮、メンテナンス性の向上を実現します。テロップ文字や差し込み画像はもちろん、画面の文字や背景色などちょっとしたデザインも病院様で変更することができます。

富士通製医事会計システム、電子カルテシステムとの連携が可能です。

対象システム：HOPE SX-S、HOPE EGMAIN-LX、HOPE LifeMark-MX、HOPE Cloud Chart、精神科向け診療支援システム Alpha



お問い合わせください。

株式会社富士通マーケティング
公共営業本部 医療ソリューション事業部
TEL：03-6712-3211

中堅規模向け電子カルテシステムの ユーザー事例研究会を東京地区で開催



富士通の中堅病院向けの電子カルテシステムは、オンプレミス型の「HOPE EGMAIN-LX」とクラウド型の「HOPE Cloud Chart」をあわせて、全国700以上の病院で稼働しています。2018年9月5日に、東京地区のLXユーザーを対象にした「HOPE Cloud Chart・HOPE EGMAIN-LXユーザー向け運用事例研究会」が富士通武蔵小杉オフィスのセミナールームで開催されました。当日は、ユーザー3施設からの運用事例の紹介、富士通LCMサービスセンターの紹介・見学などが行われました。初めての試みとして行われた“LX事例研究会”の様態を発表内容を中心に紹介します。

富士通では、大規模向け電子カルテシステムのユーザー会である電子カルテフォーラム「利用の達人」で、ユーザー間での導入経験や運用ノウハウの共有を図ると同時に、そこの意見や要望を生かして、電子カルテの機能強化などレベルアップにつなげています。利用の達人の「導入/運用ノウハウ事例発表会」は、年

1回開催され、システム活用の工夫や運用事例を発表するセッションやセミナーなどが行われ、多くのユーザーが参加します。

一方で、中堅病院向けの電子カルテシステムにはユーザー会はなく、LXの導入施設からは同じ規模の施設との情報交換や交流の場がほしいという声が上がっていました。そこで

今回、全国に先駆けて東京地区のLXユーザーを中心にした運用事例研究会を企画しました。

富士通では、2019年にも東京地区で運用事例研究会の開催を予定しています。今後、運営内容やスタイル、また、ユーザー同士の情報共有やコミュニケーション向上のための企画なども検討していきます。

運用事例報告 1

医療法人弘済会宮川病院（山梨県南アルプス市）

HOPE Cloud Chart

省スペースやサポートを評価してクラウド型システムを選定



運用事例研究会のトップバッターとして、宮川病院副院長の宮川氏が「クラウド型電子カルテ導入の経緯と導入後の経過」を発表しました。病床数41床、消化器内科・外科、循環器内科などを標榜する宮川病院では、2018年6月にHOPE Cloud Chartが稼働しました。電子カルテ導入の経緯について宮川氏は、①紙カルテの限界、②地域医療構想など医療の多様化への対応、③大学病院からの派遣医師および入職職員の若年化を挙げました。院内に業務効率化のために電子カルテ導入が必要という認識はありましたが、新しいものに対する抵抗感や経費増加に対する懸念がありスムーズには進みませんでした。そこで宮川氏は、管理者層や現場スタッフを納得させる確実なビジョンが必要だと考え、“地域医療構

想など医療の多様化への対応”として、地域包括ケア病床への転換のためには電子カルテが必須アイテムとなることを強調して導入への流れをつくったことを解説しました。

選定に当たっては、①コストパフォーマンス、②非常勤医師が使いやすいシステム、③小スペースでのサーバ管理、④確実な保守・サポート体制が基準となりました。山梨県内の公立病院のほとんどが富士通のシステムを導入しており、大学病院などから派遣される医師が使い慣れたシステムであること、院内のサーバ室が狭く導入可能なサーバの大きさに制限があったことなどから、EGMAIN-LXのクラウドタイプであるCloud Chartを選定しました。2017年7月に導入が決まり、2018年1月にキックオフ、6月から本稼働が

スタートしました。不慣れなスタッフが多かったことから、導入直後は入力ミスが相次ぎ、システム管理者への修正依頼が頻発しました。そこで窓口を一本化し、修正依頼の際には電子カルテの修正依頼票を必ず提出するルールをつくって、データの集積と同様の入力ミスの再発防止を図りました。

導入直後には大きなトラブルはありませんでしたが、宮川氏は稼働から2か月後に2回発生した“電子カルテが起動しない”という“事件”の経験を紹介しました。いずれもHUBやケーブルなどネットワークまわりが原因だったことから、クラウド型であるがゆえの注意点を紹介し、ネットワークマップおよびトラブルシューティングの作成を依頼していることを報告しました。



桜町病院は、病床数 199 床 (緩和ケア病棟 20 床、療養病床 44 床、地域包括ケア病棟 48 床など) でホスピスなど 11 診療科を標榜しています。同院では、2014 年 3 月に HOPE EGMAIN-LX を導入しました。オブションとして、統合部門ツール (手術・輸血)、DPC ツール、外注検査連携、持参薬管理、生体検査、生体画像 (PACS・RIS) などを導入しています。システム担当の小西氏は、導入体制について、各ワーキンググループ (WG) に富士通との間のバイパス役を置き、WG の要求がシステム要件を逸脱しないように調整したことを紹介しました。

小西氏は、手術動画保存の仕組みや、Excel Chart を活用した工夫などシステム担当が中心となった管理・運用の現状を報告しました。院外処

方せん (コピー防止の運用)、麻酔記録 (フリーソフトの「paperchart」を使用)、手術看護記録 (Excel Chart で医事会計に記入しやすいように作成)、放射線科読影 (AmiVoice を導入)、文書作成 (予約語を利用した身長、体重、血液型、感染症などの自動転記)、データ検索ツール (検索範囲の制限を変更して活用) などについて解説しました。例えば手術動画の運用では、同院では診療科からの電子カルテ内に取り込みたいという要望に対して、UNC 記載 (Uniform Naming Convention: 汎用命名規則、パスを指定したアクセス方法) を利用して、外部の NAS (Network Attached Storage) に保存した手術動画を呼び出しています。本来ならば専用のシステムが必要となるところですが、動画のハンドリングをリ

ンクの記載で可能にしています。

小西氏が所属するシステム担当部門は、医事課、検査科、薬剤科、診療情報管理室など部署を横断したチームとなっています。システム稼働後は、主に 1 次保守ならびに運用管理を担っており、院内の端末 (約 180 台) の初期導入以降の管理を行っています。その内容は PC の修理 (ハードディスクやキーボードなどパーツの交換含む)、新規ネットワークの敷設 (小規模のものに限る)、LAN ケーブルの自作、プリンタのカートリッジの交換、ネットワーク機器管理など多岐にわたります。小西氏は、LX の運用事例研究会のような場ができれば、こういったノウハウを蓄積して、より良い使い方を共有していきたいと今後の展開に期待しました。



大崎病院東京ハートセンターは、心臓の専門病院として 2005 年に開院。病床数は 88 床 (うち ICU・CCU12 床) で、循環器内科、心臓血管外科、麻酔科、放射線科を標榜しています。当日のうちに検査から診断、治療まで行うことをポリシーとしており、初診患者の紹介率 90% 以上で、そのほとんどがカテーテルによる診断・治療です。海外からの受診患者も増えています。

システムの導入に関しては、2014 年 3 月に「HOPE EGMAIN-LX Lite」を導入し端末 80 台で稼働、その後、運用規模が拡大したためライセンスを「HOPE EGMAIN-LX」に切り替えて端末を 100 台に増やしています。部門システムとして、栄養管理システムの「給食大将」、放射線部門の画像管理システムの「生体検査オ

プション」などが稼働しています。

同院でのシステム運用について、事務部システム担当の中富氏は、“マスタ管理から資源配布までの運用” “マスタ管理方法の改善” “外国人氏名の対応” “多職種の情報共有” などを説明しました。マスタ管理は、看護は看護部、処方・注射は薬剤部など基本的に各部署でメンテナンスを実施しています。一方で、マスタの資源配布はシステム担当が一括して行って管理を一元化しています。

また、マスタ管理方法の改善として資源配布に使用している Access のマスタデータベースから Excel のリストに書き出すことで、改定時の手技や加算の見直しや、医事コードの紐付けの確認が容易になったことを紹介しました。もう一つは、外国人氏名の対応で、電子カルテのフリガナ

に入力したカタカナがヘボン式で英字に変換されてしまうことから、患者プロフィールに英語表記で登録することで対応していることを説明しました。また、多職種の情報共有として、Excel Chart を利用して医師、看護師、医療連携室、クラークが 1 つの書類に入力できる仕組みを構築しました。データ提出加算 1 の算定に必要な様式 1 の書類を Excel Chart で作成しています。ほかにも 60 種類のファイルを Excel Chart で作成して活用しています。

同院では、他社製電子カルテのリリースで LX を導入しましたが、院内からは帳票や画面レイアウトなどカスタマイズができるようにしてほしいとの声もあり、中富氏は今後の運用事例研究会の活動にも期待しました。

もっともっと
ひろがる
電子カルテへ。



シェアNo.1*の実力を導入しやすく。 病床数に合わせたハードウェア構成や段階的な導入を可能にした 電子カルテ「HOPE LifeMark-MX」新登場!

トップシェアを誇る電子カルテとして医療現場で磨き上げられてきた機能や柔軟性を継承しながら、300床程度までの中堅病院に導入しやすい形態で提供する「HOPE LifeMark-MX」。日々の診療から、蓄積した医療情報のリアルタイム活用、地域包括ケアシステムの実現までトータルにサポートします。

シェアNo.1電子カルテの機能を継承

検査結果や処方箋などの情報をひとつの画面に同時に表示。レジメン機能も備えています。

トータルコストも削減

サーバ仮想化技術により、サーバ設置スペースと電力量を削減。コストを抑えられます。

地域包括ケアシステムにも展開可能

地域の医療機関や施設と連携することで、患者情報の集約・共有が図れます。

*参考:「月刊新医療2017 No.514」(発行:株式会社エム・イー振興協会)

FUJITSUヘルスケアソリューション HOPE LifeMark-MX

shaping tomorrow with you

社会とお客様の豊かな未来のために

HOPE Vision vol 33 2019年7月16日発行

編集・制作・発行 富士通株式会社

ヘルスケアビジネス推進統括部「HOPE Vision」企画・編集グループ

〒105-7123 東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター TEL 03-6252-2701

アンケート



HOPE Visionをご覧いただきありがとうございました。
読者の皆様のご意見・ご要望・ご感想をお聞かせください。
アンケートへご協力いただいた方には、粗品をプレゼントいたします(東京オリンピックロゴ入り手作り扇子のプレゼントは先着50名様限定です)。
HOPE Visionサイトよりご回答いただくか、本誌同封のアンケート用紙へご記入の上、FAXまたはE-mailにてお送りください。

← URL : <https://www.fujitsu.com/jp/solutions/industry/healthcare/hopevision>

PRESENT!

『東京オリンピック
ロゴ入り
手作り扇子』
先着50名様